



Title	フリードリヒ・デュレンマットの 初期散文作品集「町」について
Author(s)	濱崎, 一敏
Citation	長崎大学教養部紀要. 人文科学. 1979, 19, p.165-177
Issue Date	1979-01-31
URL	http://hdl.handle.net/10069/9697
Right	

This document is downloaded at: 2019-04-19T02:44:00Z

フリードリヒ・デュレンマットの 初期散文作品集「町」について

濱 崎 一 敏

Über „Die Stadt Frühe Prosa“ Friedrich Dürrenmatts

KAZUTOSHI HAMASAKI

序

- 〔Ⅰ〕 概観——〔Ⅱ〕・〔Ⅲ〕のために——
- 〔Ⅱ〕 テーマ
- 〔Ⅲ〕 ニヒリズム

序

デュレンマット(1921—)はおもしろい。そのおもしろさは、モチーフ発想の奇抜さにあり、表現形式の妙にあり、テーマの現代性にある。ここにとりあげる初期散文作品集は、後期の成熟した作品群と比較して、そういう意味で人を惹きつける力において決して優るとも劣らない。〔Ⅰ〕では、この作品集と作者デュレンマットとの緊密な内的関連、初期作品集としての自立的価値評価、そして表現形式の表現主義的特質について述べる。これは、作者デュレンマットあるいはこの作品集を、あらゆる角度から全般的に概観しようとするものではなく、あくまでも〔Ⅱ〕・〔Ⅲ〕へ論を進めるための概観である。〔Ⅱ〕は、プロザⅠ—Ⅳの個別的なテーマ、及び作品集全体に一貫して流れるテーマを併せて考察する姿勢でのぞんだ。神との隔絶、ニヒリズム、現実世界との接点模索が、整理できる三つの中心テーマだと考えられるが、殊にニヒリズムが他の二つのテーマの起点としてとらえられる。最後に、〔Ⅲ〕は、この作品集のニヒリズムをさらに詳しく問おうとする意図で書かれたものである。

〔Ⅰ〕 概観——〔Ⅱ〕・〔Ⅲ〕のために——

デュレンマットの初期散文作品集「町」には、1943年から52年まではほぼ10年間に亘って書かれた短篇が九つ含まれており、プロザⅠと題して「クリスマス」と「拷問役人」の二篇、プロザⅡと題して「犬」「シジフォスの絵」「劇場支配人」「わな」の四篇、プロザⅢには

「町」、プローザIVには「トンネル」及び「ピラトス」の二篇がそれぞれ組み込まれるという形をとっている。

このように九つの短篇が、プローザIからIVまで四つに分類されているという意味は少なからず重要である。個々のプローザが個別的にそれぞれのテーマをもちながら、さらに作品集「町」全体が内的に一貫し関連したテーマを孕んでいるというこの作品集の構造を示すものと云えるからである。エリザベート ブロック・ズルツァーが、これ等の作品を別々にとり扱うのは非常に困難で、この散文作品集が完結したものとなっているのは、個々の作品の完結性 (Abgeschlossenheit) のためというよりはむしろ、個々の作品間の豊かな関連の網によるものだ、と述べるのもこのような構造を説明したものと受け取ってよいだろう。作品集「町」は、個々の作品ないしはプローザI—IVを個別的にとり扱うのではなく、作品あるいはプローザI—IV間の関連を探り全体的な視野をもって把握してゆく研究姿勢を要求せざるをえない必然性を内包しているように思われる。殊に、この作品集にひそむテーマを追求する際にはこの姿勢を欠いてはならない。

作品集「町」の後書きには、作品の成立過程に次いで、作者デュレンマットの画家から作家への転向の内的ないきさつが書かれ、最後に次のように結ばれている。「この散文作品集は、何か或る物語りを物語ろうとする試みとして評価されるべきではなくて、自分自身との戦いによって何かを解決しようとする、もしくはもっとよりよく補足的に述べれば、敗北を喫したときのみ一つの意味をもちうるような戦いを遂行しようとする、やむにやまれぬ試みとして評価されるべきである。」⁽²⁾ 後書きに詳述されているとおり、作品集「町」は、画家を志す若いデュレンマット⁽³⁾が自分をとりこにしている絵画からほんの僅かでも距離をつくり、息づくことのできる逃げ道を探して哲学を勉強しながら、自分自身との戦いによって何かを解決しようとする試みであった。ベーター・シュピヒャーは、デュレンマットにとって絵画は、実存的もしくは世界観的満足にあたえるものでなかったと云い、哲学が彼にとっては、絵画芸術から文学芸術にいたる通路 (Durchgang)⁽⁴⁾ となったと述べる。このようにして、若いデュレンマットの内部的実存的思想的な葛藤の形象化としての作品集「町」には、殊のほか作者自身と作品との緊密な関係が認められる。シュピヒャーはさらに、「これ等の物語り作品のなかでデュレンマットは、神に対する戦いに宗教的信仰に対する戦いに敗北したのだった。或る意味ではまた逆に、彼はしかしながら哲学に対する戦いに、殊に絶望的なニヒリズムに対する戦いに勝利をおさめたとも云うことができるであろう」と述べる。⁽⁵⁾ 作品集「町」における作者デュレンマットの、「敗北を喫したときのみ一つの意味をもちうるような戦い」がどのような様相で展開されるのかをよりさらに詳しく問うことが、第二章及び第三章の課題でもあるが、カール・ベスタロッチやハンス・ベンツィガーがそうであるように、このデュレンマットの戦いは、単に内部的実存的自己救済志向にとどまることなく、つまるところ、作者が絵画から文学へ向い言語記述の可能性を探り、ついには彼自身に最も適した表現方法であるドラマという作法手段にた

どりついてゆく創作上の過渡的過程を見逃さない観点をもつことも、一方では必要であることは云うまでもない⁽⁶⁾。デュレンマット自身が「後書き」のなかで、これ等の散文作品を後のドラマ作品の „Vorfeld” と呼ぶ理由はここにあるのである。

デュレンマットはドラマ作家である。「後書き」のなかで彼が、初期散文作品集「町」を彼自身の後のドラマの „Vorfeld” と呼ぶとき、我々は彼のドラマ作家としての一種の自負を感じることもできる。ややともすると、作者自身がこの作品集を後のドラマ作品と比較して軽く評価しているように考えることもできる。事実その例として例えばベンツィガーのように、この作品集を「偉大な才能をのぞかせながらも、概して云えば習作的な印象を与える⁽⁷⁾」ものとしてそれほど高く評価したがる研究家達もいるのである。しかしながら、作品のもつ表現形式の特異性、モチーフ発想の面白さ、転回のあざやかさなど、一読した読者であればその自立的な高い価値を認めざるをえない。ブロック・ズルツァーは次のように評価する。「デュレンマットの初期の散文は自立的な価値をもっている。彼の作品のなかでこの領域だけを殊に好む読者達がいるのも確かである。それは、背後にあるものに好意を寄せる読者達であり、言葉の網を通してその奥を尋ねあてる術を心得ている読者達であり、前景と背景、述べられていることと暗示されていること、知られていることと予感されること、との間にある緊張に富んだ対話のなかに、劣ることのない魅力を感じとる読者達である。」⁽⁸⁾

ベンツィガーの云わば否定的評価と、ブロック・ズルツァーの肯定的評価を要約しながら論じた上で、アルミン・アルノルドもまた積極的に次のように価値づけを行う。「確かに初期の作品には、後期の作品には欠けている何かしら純粋なもの根源的なものが付随している。……『町』は後期作品がそこから成長した中核であり、それはデュレンマットの知的感情的起点状況の証である。」⁽⁹⁾ 初期作品集「町」は、デュレンマットの数多くのドラマを中心とした作品群の起点ではあるが、後の作品にはみられない自立的な要素と価値が認められる作品集である。

デュレンマットの初期散文作品集「町」の、後期作品群と比較したばあいの自立的な要素、ないしはその特質を細々と挙げようとするれば、一人称形式 (Ich-Form) の多用、自画像、カフカの⁽¹²⁾影響など、種々の観点から様々な捉え方が可能であるが、ここではその表現形式について殊に表現主義の影響⁽¹³⁾について触れておきたい。但し表現主義は、周知のように本来セザンヌ、ゴッホ、マチス等の新しい絵画形式にあたえられた概念であり、文学史的にみると19世紀後期から20世紀初頭にかけて生じた自然主義運動や印象主義に対する反動の形であられた1910—1920年代前半の文学運動であって、その理念、起源、業績、作用などについては、20世紀ヨーロッパの精神的関連に深くかかわりながら考察する必要があるであろうし、また表現形式についても、多々ある表現主義作家達の個々の特質を一概に包括的に論じることは、いつのばあいでも容易な作業ではないであろうから、ここでは、デュレンマット研究者達の論に従いながら、初期作品集にみられる表現主義的特質を幾つか挙げるにとどめたいと思う。

ヤン・クノップフは次のように総括的に述べる。「彼が殊に表現主義作家達を読んでいたと

いうこと、そしてまた彼等が彼に深い印象をあたえたということは、よく知られている。彼の作家としての初期作品も、このような読書によって、つまり人間のもつパトス、抽象性、禁欲、政治的直接性によって、しかも破滅的雰囲気及び新しい時代と新しい人間の到来にたいする期待によって、規定されているのである。¹⁴⁾ 表現主義運動の根底には、生と芸術との新しい統一を求める思想があり、かつての自然主義運動のように自然が芸術を規定するのではなくて、芸術の創造がそのまま生の創造となるべきだという強力な自己主張がある。デュレンマットの Ich-Form の多用は、このような思潮を受け入れた一種の自己主張形式だと考えられるであろうし、しかも、この自己を主張する Ich はデュレンマットのばあいにも常に、疎外され孤立し世界との関連を喪失した存在であって、従って、Ich の意識には世界自体が内的関連を失なったものとなって映し出されるのである。その他作品集「町」の表現主義的特質としては、作品を一読すれば明白だが、作品内の時間空間が極度に抽象化され、歴史的にあるいは地誌的に具体的に規定されていないということ、登場人物も町も具体的な固有名詞をもたないということなどが挙げられる。ブロック・ズルツァーは、デュレンマットの月及び月景色の愛好を、表現主義の白黒芸術 (expressionistische Schwarz-Weiß-Kunst) を思わせるものだと述べているし、¹⁵⁾ 作品「拷問役人」のもつスタッカートの言語リズム形式を、表現主義的だとする者¹⁶⁾、作品「クリスマス」内の、繰り返し発せられる叫喚を、或る表現主義作家に模して論じる者¹⁷⁾など、個々の例を挙げながら、初期のデュレンマットに対する表現主義の影響を論じている研究者は多い。このようにして、初期散文作品集「町」のもつ大きな特質、自立的な要素を我々は、多少概括的にならざるをえないけれども、「表現主義的」と名づけることができるであろう。

以上のように、第一章においては、作品集「町」と作者デュレンマット自身との緊密な内的関係を論じ、初期散文作品の、後期のドラマ作品を中心とする作品群にはみられない自立的な価値評価について明らかにし、さらにはこの作品集のもつ表現主義的特質について論じてきた。

〔Ⅱ〕 テ ー マ

第一章で述べたとおり、初期散文作品集「町」のテーマは、個々のプロローグ I—IV の内部で孤立的に論じられるばかりではなくて、作品集全体の関連のなかでとらえられる視点が大切である。またこの作品集は、「自分自身との戦いによって何かを解決しようとする」作者デュレンマット自身の「やむにやまれぬ試み」であるのだから、そのテーマを追求し論じてゆく過程のなかで、作者デュレンマットの内面的葛藤の様相もまた明白になるはずである。

アルミン・アルノルドが、「この作品集がキリスト生誕の日にはじまり、キリストの磔刑の日¹⁸⁾に終わっているのにまだ誰れも気付いていないように思える」と指摘するとき、一見とるに足りないものにみえながら、これはその実大変重要な示唆を含んでいる。作品集の最後におかれ聖書をそのまま素材にした作品「ピラトス」(プロローグ IV) のなかで、ピラトスは群衆にとり

まかれたキリストが神であることをすぐに悟るが、彼は終始神の存在におびえながら、神を救済したいという意に反して笞刑に処し、ついには磔刑を命ずることを余儀なくさせられる。わずか24行の単純過去ばかりの文章で綴られた冒頭作品「クリスマス」(プローザI)では、広大な雪の原野のなかにみどり子キリストが凍てつきながら死んでいる。空腹を覚えた Ich が、みどり子キリストの頭を喰いちぎるという凄惨な結末は何を物語るのか。その「古いマルチパンの味」は何を意味するのか。デュレンマットの演劇及び散文作品のテーマの全てに、一貫して流れる全般的統一テーマを「慈悲」(Gnade) だとするフリッツ・ヴウリィは、ここでもまた、「古いマルチパンの味」というのはキリストとその「慈悲」について述べたものだと解釈するのだが、⁽⁹⁾「ピラトス」と同じように神と人間との隔絶の問題がここでも提示されていると考えることができる。シュピヒャーもまた次のように述べる。「『クリスマス』のなかでは、神は生きているのか死んでいるのか、存在するのか存在しないのかという問いは、答えがあたえられてはいないし、しかも、もともとこの問いは設定されてはいないのである。ここで問題となっているのは、一人称の語り手 (Ich-Erzähler) の子供のようなキリスト信仰が奪われてしまったという世界体験である」⁽¹⁰⁾

作品「拷問役人」(プローザI)では、見知らぬ男 (der Fremde)、実は神が、拷問役人 (der Folterknecht) に二年間の約束で姿をとり換えるようもちかける。

「私は君になりたい。私の生は無へ向う下降である。君の生は無のなかでいつも同じ。私は君がうらやましい。君こそ最も幸せな人間だ」⁽¹¹⁾

だが神は約束の日に現れない。以前の拷問役人、現在の見知らぬ男、は次第にかつての残忍な本性をあらわし、ついに妻を殺害する。次いで裁判にかけられ拷問部屋へおくられる。

「拷問部屋は世界。世界は苦。拷問役人は神。神が拷問する。

人間は叫ぶ、

なぜあなたは来なかった？

神は笑う、

どうして私が再び人間にならなくてはならないのか。

人間はうめく、

どうしてあなたは私を苦しめるのか？

神は笑う、

私に影は必要ない。

人間は死ぬ

」

さらに、デュレンマットの自画像——彼がみるものの背後に、何かしら恐ろしいものをいつ

も感じている太った24才の学生⁽²⁴⁾——が主人公である作品「トンネル」(プロザIV)では、いつも利用している通学列車が、トンネルの中で、突然地球の内部へ向けて真逆さまに落下してゆく。やっとの思いでたどり着いた汽関車のなかで、列車長が恐怖のうちに尋ねる。「どうしたらいいのでしょうか？」主人公は答える。「何にも。神が私達を落下させるのですから、私達は神へ向って落ちてゆくのです。」

初期散文作品集「町」において、神は人間から遠く離れた存在であるばかりではなくて、慈悲をあたえるどころかむしろ人間を拷問によって苦しめる、言わば「サディスト的な存在⁽²⁵⁾」であって、人間を必要としていない。人間は神から隔てられ、世界のなかで苦しみのみを受ける小さな存在でしかない。このようにして、プロザIIの四篇の作品では、ことごとくニヒリズムがそのテーマになっている。ニヒリズムのテーマは、〔III〕においても詳細に検討するので、その内容を明確にするために個々の作品について次に述べる。

1. 作品「犬」

工場をいくつも経営していた豊かな男が突然ある日、妻と子供達を捨てて家を出る。聖書を片手に、街頭で「人々に真実を告げる」ために全てを捨て去った父と、父に従って家を出た娘(少女)に、その日から巨大な黒い犬がいつも影のようについてまわるようになる。父は、この犬にいつも怯えながら暮らしているが、ついには、この犬に噛み殺され、「黒い血だまりのなかの白い肉塊」となってしまう。おおがかりな搜索もむなしく少女は姿を消すが、ある夜、「私」は少女が犬につきそわれるようにして街路を歩き夜の中へ消えてゆくを見る。

この「黒い犬」は、人間につきまとい時には人間を破滅させずにはおかない運命的な力を予感させる。人間は、この「犬」の前に無力な存在として怯えながらも、この「犬」を振り捨てることは不可能なのだ。

2. 作品「シジフォスの絵」

「赤マント」と呼ばれる男が、ヒエロニムス・ボッシュの偽造品を描き、それをもとにして巨万の富を得る一大事業家になるが、「無から何かを」創造するために再びこの絵を買い戻そうと企図する。しかしながら容易には相手の大銀行家も屈しようとしないうちに、双方の間に陰に陽に、この模造品を巡って経済的な陰惨壮絶な戦いが展開される。ついにこの「赤マント」は、ボッシュの絵を買い戻すことに成功するが、彼はその時無一文になり、廃墟と化していたるところに差し押えの札のかかった家具調度のなかで、茫然と空を見つめるばかりである。

主人公は、「無から何かを」創造することに成功することなく、結局自分自身で「シジフォス」を演じたに過ぎないあわれな存在である。

3. 作品「劇場支配人」

「劇場支配人」がある凡庸な女優を主人公に祭り上げ、劇場を芸術以外の目的のために、すなわち俳優達と観客を悪へ導くために利用する。ナイフを装備した一見昆虫のような仕掛けが、この女優を空中高く吊り上げ、観客の「殺せ」という叫び、万来の拍手のなかでこの女は、ナ

イフで切りきざまれ、切り落された首は観客の真中に落下するという、再び凄惨なこの物語りは、ナチ時代という時代背景を考慮にいれて、「支配人」はヒットラーに、劇場はドイツに、女優は中庸を保つ人間理性に、解釈される。²⁷⁾

4. 「わな」

この作品は当初「ニヒリスト」のタイトルで出版されたもので、プローザⅡの四つの作品のなかでは最も鮮明にそのテーマが読みとれる作品である。若いときから自殺を決心して、死を研究し死とたわむれるようになり、彼自身の生が今や虚偽 (Lüge) になりはてているという一人の高級官吏が、死に場所と相手を求めて或る国境の村にたどり着く。この村でやはりニヒリストである未亡人と巡りあい、これを射殺することになるが自分自身は死ぬことができない。

「彼は一度、それから数度、ねらいをつけずにピストルを発射した後、長い間闇のなかで立ちすくんでいた。だが彼は、弾が命中したことは知っていた。それから彼は、自殺することはできないまま部屋の真中へ向って歩いていった。『私は生きたい』と彼は、彼女を手探りながら大声で云った。

『私は生きたい』、そしてもう一度『生きたい』と。」²⁸⁾

こうして彼は、結婚し職をもち、子供と車と家とそして愛人をもつごく普通の人間となるが、「死の旗をかざして無の世界へ旅立とうとする無駄な試み」を常に胸に密めているために、全てが馬鹿馬鹿しいものに思われる、というのである。ニヒリストは、このような自分の人生を「私」に打ち明けた後、「私」をも射殺しようとするが、今度は殺人を犯さずに、ピストルを自分に向けて自殺を遂げることになる。

この作品「わな」をより一層重々しい説得力のあるものにしていく要素として、未亡人と共にしたベットの中でニヒリストが見る夢の描写部分がある。この部分は物語り全体の三分の一を占めるもので、人間の歴史を深淵につづく階段になぞらえ、奈落の底には地獄の火が燃えている。人は皆この火に焼かれて破滅する運命をもつのだ。このニヒリストも、「お慈悲を、神のお慈悲はどこに」と叫び声をこだませながら燃えたる火炎の中へ落ちてゆく。作品「わな」のなかでは、個々の人間に限らず、世界も歴史も全て無の深淵へ下降してゆくのである。

個々の作品を検討しながら、プローザⅡにおけるニヒリズムのテーマをみてきたが、初期散文作品集「町」のタイトルともなっている作品「町」(プローザⅢ)は、九篇の作品のなかで最も長く、この作品集が内包しているあらゆる要素とテーマを豊富に具現しながら叙述されている作品である。表現形式も他の作品と基本的に同じであって、例えば、再び場所と時間は抽象化され、登場人物も町も namenlos である。全部で六節に分かれた叙述形式で、必ずしも物語りは常に脈絡を保ち終始一貫しているわけではない。しかしながら、この作品「町」が他の八篇と異っている最大の特徴は、その内容が、自己と現実世界との直接的な関わりを求め模索して

ゆく姿勢を表現しているものだ、ということである。主人公の「私」は、これまでのように、神との隔絶を嘆き、ニヒリズムにひたるばかりではなくて、「町」という言葉で象徴される「現実世界」と、あるいは対決しようと試み、あるいはその中で自己の位置づけを見出そうと努力する世界のなかにおかれている。但し、この「町」という象徴的存在を「神」というふうに解釈づけることも可能であろう。ここに作品「町」がもっているテーマの複雑さと豊かさがある。

シュピヒャーの云うように、作品「町」は二つの主要部分に分けて整理することができる。一つは、若い画家「私」の「町」に対する反抗と戦い、第二には、「町」の監獄における看守という勤め、の部分である。

「誰れも空腹を知る者はなかった。貧者も富者もなく、仕事をもたない者もなかった。しかしまた、子供達の笑い声が私の耳に入ることも決してなかった。町は沈黙した腕で私を包み込み、町の石のような顔の両眼は空虚だった。……私の生は無意味だった。というのも、町はそれが必要としないものを拒絶したからである。」

ここには「町」の有様と、そして「町」と「私」との関係が描かれている。若者はこうして「町」に対して反抗心を抱くようになり、机の上で「町」に対する無意味な反抗のパンフレット」を沢山書き散らしたりする日々を過す。或る日、この若者の反抗は、「石炭運搬人」によって引き起された暴動参加への道をたどることになる。群衆は泥酔した石炭運搬人を先頭に押し立て、手に手に得物を携えて「町」に向って突進してゆくが、橋の真中で旗ざおを握り立ちふさがっている老いた「狂人」の姿をみて、暴徒と化した群衆は一度にはたと立ち止まってしまう。

「我々を麻痺させたのは、この狂人の姿ではなかった。我々を恐怖で満たしたのは、町が、我々をそれほど軽蔑しているということ、そしてどうしようもない狂人以外のなにものも我々に対して押し立ててこないほど、町は勝利を確信しているのだ、という認識であった。」

石炭運搬人は歩み出て、この狂人に道をあけさせようとするが、突然この時、狂人は大きな叫び声をあげはじめ。この叫び声は、両手で口をふさいでも指の間から漏れ、にぎりこぶしを喉に突き入れてもまだそこにあった。「橋の手すりにも、家々の切り妻にも、聖堂のキメラにも、輝く月の球体にも」万物を含めて響き渡る。ついには、石炭運搬人共々狂人は橋の下、奈落の底へ落下してゆくが、それでもこの叫び声は、深淵から劣えることもなく響き続ける、というのである。「狂人」の存在は、人を拒絶する「町」の力の象徴である。形容しがたいこの途方もない叫び声は、全てを包んで無に帰してしまうニヒリズムの叫びと考えられないか？ こうして反抗と反乱は挫折する。

「私は、町の力と完全さとそして私の敗北を通して私の無力を知った。我々は人間であって神々ではない。我々はまず体験によって、それから思考することによって、

はじめて物事を理解することができたのだった。我々は、認識するためにはまず拷問を受けなければならない。苦悩の叫びにたいしてのみ答えがあたえられるのだ。⁶²」

さて、若者は、この挫折の後、町の監獄で看守の職に就く。細かないきさつをこれ以上述べると煩雑になるので省くことにするが、第二部とも呼べる作品「町」の後半部分は大半、囚人と同じ服を着せられ地下の独房の中に入れて、自分は本当に看守なのか、実は囚人ではないのかと思惑い、それを確認するためのささやかな行動とそれから思考を重ねる描写に終始している。従って、物語りの展開は一見すると前半部分ほど豊かではない。看守か囚人か？という云わばくどくどしい、しかし読者を飽きさせることのない内部思考と模索の有様が続いているのだが、物語りの終末で次のように述べられる。

「しかしながら、私の熟考がこの点まできたとき、決定的な考えが浮んだ（言わばコペルニクス的転回である）。すなわち私は看守たちの配置を別様に考えなくてはならなかったのだ。私は……」⁶³」

物語りの結末は、「私」の熟考がこのようにしてとめどもなくはてしなく続いてゆく様相を暗示している。

作品集「町」の「後書き」でデュレンマット自身が述べているとおり、この作品「町」の地下牢は、プラトン「国家」第七巻「洞窟の譬」を模したものである。再びシュピヒャーは次のように言う。「デュレンマットの洞窟の譬では、自由と束縛、力と隷属、孤独と共同体、論理と現実、ニヒリズムと信仰、の問題が問われているのだ。⁶⁴」看守か囚人か、という一見素朴な自己に対する問いかけは、現実の世界と「私」とのあらゆる関連を問いなおして、自己の位置づけを明白にしようとする試みを内部に密めているのである。

この章で考察してきた初期散文作品集「町」の、個々のプロローグにおける重点的なテーマは次のように整理できる。

プロローグⅠ	—	神との隔絶
プロローグⅡ	—	ニヒリズム
プロローグⅢ	— {	神との隔絶
		ニヒリズム
		現実世界との接点模索
プロローグⅣ	—	神との隔絶

但し、例えばプロローグⅠにもニヒリズムがあり、プロローグⅡにも神との隔絶の問題が含まれ表現されている、という具合に考えなければならないのは当然であって、これ等のテーマが、個々のプロローグⅠ—Ⅳのなかで図示したとおり単一的に孤立的にとり扱われているわけでは決していない。図示したのはあくまでも „重点的” なテーマである。

〔Ⅲ〕 ニヒリズム

前章において、デュレンマットの初期散文作品集「町」のテーマを、「神との隔絶」「ニヒリズム」「現実の世界との接点模索」の三つに要約し整理してきたが、この章ではニヒリズムのテーマを起点として、それぞれのテーマが内的にどのような関連を保っているかを明らかにしてゆきたい。

ペスタロッチが、「これ等の作品が形象をあたえている世界のなかには、いたるところ人間を下方へ破滅へ引き入れる渦がある」と作品集「町」を概括して、この「破滅の渦」が個々の作品にどのように具体的に表現されているかを詳細に語る⁶⁵とき、彼は、作品集「町」の全ての作品の基底に一貫して流れているニヒリズムのテーマに焦点を当てていると云うことができる。またアルノルドが、プローザI「クリスマス」及び「拷問役人」について、双方の作品にあらわれた神について考えるばあいには、作者デュレンマットが「神は死んだ」と告げようとしていると推測するのは必ずしも妥当ではない、と云い、これ等は「生の真実を自覚し、自分自身のよるべなさ⁶⁶と弱さを知り、人間をフェアに扱わず、よりよい機会をあたえようとし⁶⁷ない神に対して怒りを覚え、そしてこのような理由から、神を愛し信じることができない人間の絶望」を描いたものだ、と述べ、且つまた「この作品集は、キリストの生誕にはじまり、キリストの死に終わっているが、この二つの作品はキリストの不幸や孤独を表現したものではない、……デュレンマットは、人間はみどり子キリストも磔刑に処せられたキリストも頼みにすることはできない、彼等は人間を見捨て返り見ることがないのだ、ということ⁶⁸をむしろ示そうとしているのだ」と語る⁶⁹ときもまた、作品集の基調にあるニヒリズムと、ニヒリズムに囚われた人間の状況を適確に要約しているのだ。作品集「町」において神は死んではいない。神は存在して人間を拷問し突き離し苦しみに追いやる、そのような存在として描かれている。「ツァラトゥストラ」のなかで「神は死んだ」と云うニーチェのニヒリズムと、そしてデュレンマットのニヒリズムを比較対象しながら、クノップフは次のように述べる。曰わく、「ニーチェのばあい、神の死が、人間が自己を解放する、『背後の世界』を神の国を創造する自己解放の行為だとすれば、ニーチェのばあい、神の死に続くニヒリズムが、新しい『肯定』(Ja)にいたる途上にあるかつての人間の『没落』であるとすれば、デュレンマットのばあいには、ニヒリズムは単に神が復讐を企てる無意味でゾツとする世界の明るさまな提示に過ぎないのだ。神からの離反は、自己解放の作用をもつのではなくて、あらゆる人間の繋がり、あらゆる意味関連の崩壊をもたらすものなのである。」⁷⁰

デュレンマットのニヒリズムは、あらゆる価値と権威の否定と崩壊を告知するニーチェのニヒリズムとは異質なものである。最後に、オーベルレは次のように結論づける。「デュレンマットはニヒリストか？ ニヒリズムが、我々人間世界の完全、礼儀、誠実、正直、調和にたいする懐疑を意味するものとすれば、デュレンマットはニヒリストである。……さらにニヒリ

ズムが、人間の喜びと苦しみそして人間の獲得物を、絶対的におおきなものとみなさず、むしろそれ等が神の被造物の総体と、あるいは神の無限性と比較して、あるいは死に直面して、グロテスクで倭少なものと現れるとすれば、彼はニヒリストである。……しかしながら、ニヒリズムという言葉に、あらゆる規範の拒否、あらゆる価値の等価性、あらゆる認識の無価値性、及び恐らくは形象をもたない混沌 (Mischmasch) に対する好みを読みとるとすれば、そうすればデュレンマットはニヒリストではない。⁽⁹⁾」

無限で絶対的な力と完全さを具備して、人間に復讐を加える神と、自己との対置関係で生じるニヒリズムが、デュレンマットのニヒリズムであり、決してそれはあらゆる価値と世界を否定しようとするものではない。このニヒリズムを基点として彼は、現実界を分析し問いなおし、接点を模索してゆくのだ。作品「町」の後半部で「看守か囚人か？」と自己の在り方を永遠に問い続ける姿勢をみせるのは、彼のニヒリズム脱脚のための強力な意力の表われである。

Anmerkungen

- (1) Vgl. Brock-Sulzer S. 278
- (2) Text S. 197-198
- (3) Die Stadt の後書きによると、この作品集のなかの大部分は1943~46年の三年間で、つまりデュレンマットが22才~25才までの間に書かれたものである。
- (4) Vgl. Spycher S.32
- (5) ibid. S.33
- (6) Vgl. Banziger S.142, auch Pestalozzi S.387
- (7) Banziger S.142
- (8) Brock-Sulzer S.278
- (9) Arnold S.9
- (10) 作品集の九篇の作品のうち、六篇が Ich-Form である。
- (11) Vgl. Spycher S.104, auch Arnold S.18 二人の研究者は、作品「トンネル」の主人公、太った24才の学生がデュレンマットの自画像であることを実証している、その理由は、デュレンマット自身が1942~43年まで Zürich 大学で学んでいて、当時 Bern-Zürich 間を往復していたこと、そして17時50分の通学列車が当時実際に走っていたということ、などである。
- (12) デュレンマットの初期散文作品に対するカフカの影響を指摘する研究者は多い。但しその観点はさまざまである。
Z. B. Sulzer S.28, Arnold S.8,S.11,S.14, Banziger S.142, Spycher S.91 usw.
- (13) 以下、表現主義に関する概括的叙述は Fritz Martini に多くを負うている。
- (14) Knopf S.13
- (15) Vgl. Brock-Sulzer S.280
- (16) Vgl. Spycher S.47-48
- (17) Vgl. Arnold S.10
- (18) Arnold S.11, auch Pestalozzi S.386
- (19) Vgl. Buri S.37
- (20) Vgl. ibid. S.62
- (21) Spycher S.41

- (22) Text S.16
- (23) Text S.20. 第一章で論じた、初期作品集の形式の特徴例を示す意味で、ほんの一部ではあるが、ここに原文をあげる。
 “Die Folterkammer ist die Welt. Die Welt ist Qual. Der Folterknecht ist Gott. Der foltert.
 Ein Mensch schreit:
 Warum bist du nicht gekommen?
 Gott lacht:
 Was soll ich wieder Mensch werden.
 Ein Mensch stöhnt:
 Was quälst du mich?
 Gott lacht:
 Ich brauche keinen Schatten.
 Ein Mensch stirbt.”
- (24) Vgl. Text S.151, “Ein VIERUNDZWANZIGJÄHRIGER fett, damit das Schreckliche hinter den Kulissen, welches er sah (...), nicht allzu nah an ihn herankomme,...
- (25) Text S.167
- (26) Vgl. Arnold S.13, “Die Erzählung illustriert, daß Gott im Grunde ein Sadist ist, in dessen Natur es liegt, den Menschen quälen zu müssen.”
- (27) Vgl. Arnold S.15, Brock-Sulzer S.287-289, Spycher S.65-72. ちなみに、作品「劇場支配人」の成立は1945年である。
- (28) Text S.100
- (29) Vgl. Spycher S.91
- (30) Text S.110-111
- (31) Text S.122-123
- (32) Text S.116
- (33) Text S.145
- (34) Spycher S.91
- (35) Vgl. Pestalozzi S.385 以下。幾つか例をあげると、作品「わな」のなかの火の海への落下、「トンネル」では汽車が地中へ垂直に落下、「シジフォスの絵」では主人公の破滅、「拷問役人」及び「ピラトス」では、神が人間化 (Inkarnation) することにより言わば破滅へ巻き込まれる等々。
- (36) Arnold S.11
- (37) ibid. S.19
- (38) Knopf S.15
- (39) Oberle S.23

Literaturverzeichnis

- Text: Friedrich Dürrenmatt. Die Stadt Frühe Prosa, Zürich 1952
- Brock-Sulzer, Elisabeth: Friedrich Dürrenmatt. Stationen seines Werkes, Zürich 1970
- Arnold, Armin: Friedrich Dürrenmatt, Berlin 1974
- Spycher, Peter: Friedrich Dürrenmatt. Das erzählerische Werke, Frauenfeld und Stuttgart 1972
- Bänziger, Hans: Frisch und Dürrenmatt, Bern und München 1976

- Knopf, Jan: Friedrich Dürrenmatt, München 1977
- Martini, Fritz: Der Expressionismus, In: Deutsche Literatur im 20. Jahrhundert. Strukturen und Gestalten, Hrg. v. Otto Mann und Wolfgang Rothe, Band I, Bern und München 1967
- Pestalozzi, Karl: Friedrich Dürrenmatt, In: Deutsche Literatur im 20. Jahrhundert. Strukturen und Gestalten, Hrg. v. Otto Mann und Wolfgang Rothe, Band II, Bern und München 1967
- Oberle, Werner: Grundsätzliches zum Werk Friedrich Dürrenmatts, In: Der unbequeme Dürrenmatt, Basel und Stuttgart 1962
- Buri, Fritz: Der «Einfall» der Gnade in Dürrenmatts dramatischem Werk, In: Der unbequeme Dürrenmatt, Basel und Stuttgart 1962
- Profitlich, Ulrich: Friedrich Dürrenmatt, In: Deutsche Dichter der Gegenwart. Ihr Leben und Werk, Hrg. v. Benno von Wiese, Berlin 1973
- P. Knapp, Gerhard: Wege und Umwege: Eine Forschungsbericht, In: Friedrich Dürrenmatt. Studien zu seinem Werk, Hrg. v. Gerhard P. Knapp, Heiderberg 1976
- E. Helbling, Robert: Grotisches und Absurdes-Paradoxie und Ideologie. Versuch einer Bilanz, In: Friedrich Dürrenmatt. Studien zu seinem Werk, Hrg. v. Gerhard P. Knapp, Heiderberg 1976
- Oberholzer, Otto: Die Literatur der Gegenwart. Aspekte und Tendenzen, Hrg. v. Manfred Dursak 1976
- Mayer, Hans: Dürrenmatt und Frisch. Anmerkungen, Pflingen 1963